

第五詩集「パンデミックのその後で」

積 緋露雪

目次

自同律にかまけてゐられるのは選民思想の色濃い反映か	2
静寂を求めて私は Radiohead を聴く	3
どうしようもない倦怠感の中で	4
物憂げな魂を抱え込んでも尚、前を向く	6
隙あらば	7
老犬死す	8
丸腰で	9
ボトルネック・ギターに酔はされて	10
天邪鬼	11
災厄は神の思し召しか	12
溢れ出す死	13
覆水盆に返らず	14
愛する人へ	16
あなた	17
足を掬はれる	18
遁走	18
分析哲学全盛の中でも尚	19
私的夜想	21
暗鬱を抱へてしまったので真っ暗闇に逃げ込むと	22
永劫から引き裂かれ	23
前歴史における世界開闢物語	24
第一の時代	25
第二の時代	25
第三の時代	26
第四の時代	27
第五の時代	29
第六の時代	30
第七の時代	31
白い野良猫	32
幾星霜	33
頑なに	34
顛覆	35
消ゆるのは吾のみや	37
対峙	39

腹を据ゑて死を受容す.....40
壊れ行く日常の中で吾は座して死を待つのみか.....42

自同律にかまけてゐられるのは選民思想の色濃い反映か

青年の流行病はやりやまひの如き自同律に

今以て膠着する吾は

もしかするとその内心の奥底では

「私は高尚なことをしてゐる」

などとふんぞり返った選民思想に毒されてゐないか、

と、思はざるを得ぬこと屢屢である。

自と他の差異を暗黙の了解として繰り広げられる

自同律の涯なき思索は

約めて言へば、何の事はない

——こんなにも嫌ひな自分が好きで好きで仕様がな

いふことに尽きる。

この矛盾した己に対する感情のAmbivalentアンビヴァレント

振り回される快感が蜜より甘いのである。

静寂を求めて私は Radiohead を聴く

閑さや岩にしみ入る蝉の声と芭蕉が詠んだやうに

この灼熱の中でちょっとした涼を求めるには

静寂との無謀な戦ひを挑んでみるとしか思へぬ

Radiohead の音楽に溺れることで

静寂に沈む快楽に惑溺しながら、

心は涼む。

この人工的な現代の涼み方は

アスファルト

Asphalt に蔽はれてしまった路上の上に

その亡骸を転がせてゐる油蟬のその行く末の無念を思ふと

つまり、直に土の上に転がれぬ無念は底知れぬもので、

土から離れてしまったこの人工的な世界では

死もまた、人工的な印象を強烈に残す。

そして、灼熱もまた、余りに人工的で、

唯、そんな世界の中で自然を保持してゐると思はれる人間の歌声を

デジタル化したもので聴くことで

涼を求める私は

この人工的な世界にある意味適応してゐるといふことで、

吾ながら苦笑せずにはをれぬ。

ならば、痩せ我慢をしてでも

この人工の世界の中で生き延びることには

何かしらの意味があるやなしや、

と、自問自答する。

新形コロナウイルスが蔓延る現代において、

それは人工的な世界への自然の反乱であると

腹を括って

受容する諦念にこそもしかしたならば真理と呼べるものが

隠されてゐるかもしれず、

と、そんなことを人工的な静寂の中において

つらつらと考へるのであった。

つまり、圧倒的に欠落してゐるのは

自然に対する皮膚感覚の触感で、

私は只管それを追い求めてゐるだけの
夢追ひ人の一人に過ぎぬのかもしれない。

――馬鹿が。

どうしようもない倦怠感の中で

何かをする氣力が湧くことは全くなく
体軀は手枷足枷を付けたやうに途轍もなく重重しく
どうしようもない倦怠感が魂魄に張り付く中で私は、
唯、横になり、その倦怠感が過ぎ去るのを只管待つといふ
余りに消極的な行為でしか

このどうしようもない倦怠感と付き合ふ術がなかった。
つまりはお手上げ状態なのである。

この敗北は私を矮小化してのことなのかといへば
そんな事はなく、

土台私といふ存在はそんなものである。

この息絶え絶えの私に対して、しかし、内部の異形の吾は全く容赦がない。

此処ぞとばかりにその異形の吾は私の捕獲作戦に取りかかってゐたのであった。

弱り目に祟り目で、

私は内部に異形の吾といふ鬼子を抱へてゐたので、

このどうしようもない倦怠感に苛まれてゐる私は

異形の吾に対して無条件降伏をせざるを得なかった。

異形の吾に捕獲された私は異形の吾にまじまじと凝視され、

――へっ。

と、嘲笑されてそのまま捨て置かれたのであった。

さうして猛暑の中、日日弱ってゆく私。

その羸弱るいじやくな私が氣に喰はなかつたのであらう、

異形の吾は私を一瞥するなり、私を棄てたのだ。

そこには異形の吾の深い幻滅が横たはってゐたかもしれないが、

今でも超人を、私に超人を見たかつた異形の吾は

とんだ無駄足を運んだのである。

ニーチェにかぶれてゐる異形の吾は

何かを勘違ひしてゐて

この葦にも劣る羸弱な私が超人でなければならぬといふ

先入見に毒されてゐて、

いふなれば異形の吾は私に対して癒やしがたい偏見の塊といふ訳なのである。

物憂げな魂を抱え込んでも尚、前を向く

憂鬱に没する私の宿痾においても尚、

どろんと死んだやうな目で顔を上げ

前を向く姿勢は崩さぬことで、

何とか死の誘惑からこれまでは逃れてきたが、

それも限界と何度思っただらうか。

死の淵から飛び降りずに

踏み留まったのは

生への激烈な執着と敗残者になることを嫌った私の思ひといふより
単なる偶然ではない。

物憂げな魂を抱え込んでも尚、前を向くことで、

死の誘惑を振り払い、

無駄な足掻きと知りつつも

死臭をブンブンさせながら

さうして生き恥をさらし、

後は野となれ山となれと開き直り、

屈辱に塗れながら生きるのみ。

絶え絶えの生に倦み疲れたとはいへ、

この宇宙に一泡吹かせるまでは

何としてでも生きるといふ覚悟のもとで

この極度の宇宙嫌悪が負け戦と解った上で、

討ち死ぬことを本望として

ズタボロの魂を以て

抜刀一閃、宇宙をぶった斬って

吾が哀しみを少しでも宇宙に味はふことをさせられれば、

宇宙も少しは屈辱の何たるかを知り、

存在に尻込みする筈だ。

さすれば宇宙が存在を抱くことを遂には恥ぢ入り

宇宙は二度と存在なんぞを生むことなく、

——ちえつ。

と、非在もまた深い懊悩の中にあるのだとの思ひを馳せ、
宇宙それ自体が深い懊悩にあることを自覚するに至れば、

もうちつとはましな此の世が存在できたやもしれず、その蓋然性に先づは宇宙が愕然とする筈なのである。

さうせずば、宇宙は無思慮に存在を生み出し続ける。

隙あらば

隙あらば吾を抹殺しようと

手ぐすね引いて待ってゐる貴殿は

何故吾が命を狙ってゐるのか尋ねたところで

黙したまま何にも喋らぬが、

それは卑怯といふものだらう。

と、吾を狙ふ暗殺者をでっち上げたところで

このなんともいひやうのない私のくすんだ魂は色めきすら立たぬ。

色めき立たぬどころか

その余りにもあざとい私の遣り口に

私を心の底から嗤ってゐる。

死を振り翳さないことには

最早、何の感興も起きぬこの墮落した魂には

休息のみ必要なのだ。

私の苦悩の形が煎餅布団に人型としての窪みを残せば

それが私の影に似たものであることを知って、

少しは私の慰みにもならうが、

このどうしやうもなく遣り場のない私は

他にその憤懣をぶつけることは御法度で、

況やものに当たることはいふに及ばず。

然し乍ら、自死願望があると思はれる私を

よくよく凝視してみると

それは私が誰の相手にもされないことに対する赤子の如き我儘故にのこと。

その情けなき吾が有り様は救ひがたし。

ならば、キリーロフの如くみつともなく

ピョートル・ヴェルホーヴェンスキイに強要されて、
拳銃自殺する神人の憐れな終幕を
なぞるが如くに死んでしまへばいいのだが、
それすらもできぬ意気地なしの私は
やはり、表象の吾を Game の如くに撃ち殺し、
死んだ表象を喰らふことで
吸血鬼が生き長らへるやうに
Zombie として生きるのが関の山なのだ。

老犬死す

長患ひの末に
お前は最期は眠るやうに静かに息を引き取った。
前日まで、お前は少し眠っては
しかし、寝るのが怖かったのだらう、
すぐに目を覚まし、
私を哀しげな鳴き声で呼んだ。
どす黒い死の影に自ら蔽はれてゐたことを
その膿で曇った目玉で
ちっと凝視しながらも、
時間をかけてゆっくりと死を受容していったのだらうか。
最期の日は、水も受け付けず、
もう、体軀を起こす力もないお前は
それでも、お前の大好きだった鯖の水煮をペロリと喰った途端に
既に眼球は痙攣を起こしてゐるやうに
上下に揺れ動いてゐたが、
瞼をゆっくりと閉ぢて
それ以降、目覚めることはなかった。
それは大往生に相応しく
最期の潔さは
お前が死を受け容れる精一杯の寛容の姿勢だったのか。
死の直前、お前はゆったりと深い呼吸で眠りながら、
何を夢見てゐたのだらう。

お前の頭に手を当てながら、
私はお前のその死へ向かうときに見てゐたであらう夢に
思ひを馳せつつ、
私もまた、お前が死の路へと出立してしまったと
確かに知りながらも

知らず知らず
不知不識にお前との二十年間をしみじみと振り返りながら、
頬には涙が滴り落ちてゐた。

死から取り残されるものはみっちいもので、
お前の覚悟の莊嚴な眠りにはどう足掻いても勝てないのだ。
お前の最期の安らかさには
既に後光が差してゐるやうに感じたが、
それは生に見切りを付けちまったお前の凄みだったのかもしれない。

丸腰で

いつ如何なる時も丸腰であらねばならぬ。
何故って、それがこの凄惨な世界で存在する最低の礼儀だからさ。
米国のやうに銃を持つのは卑怯の極で、
存在の礼儀知らず極まりなく、
話にもならぬ。
それは他への不信に満ちた存在に対する猜疑心丸出しの行為であり、
存在に対して失礼極まりない。
とはいへ、丸腰であることは非武装中立といふ
箸にも棒にもかからぬ空論を言つてゐるのではなく、
存在に対して敬意を抱いたならば、
丸腰でしか存在の振る舞ひは取り得ぬのだ。
それが唯一存在の此の世で取り得る存在に対する礼節であり、
帯刀した侍でも茶室に入るときは
刀を置くやうに
存在が存在に真剣に対峙するときは丸腰でなくてはならぬだ。
それがどんなに不合理でも、
また、武装したものの前でも、

丸腰であらねばならぬ。

それで死んでも

己はそれまでの存在と

己に對して呪ふ外にない。

さうしなければ、

――奴は敵だ。敵は殺せ。

の短絡は無くならぬ。

――へっ、何を惚けたことをほざいてゐるのか！ 武装したものの前でも丸腰なんて、酷といふものさ、ちえっ。

ボトルネック・ギターに酔はされて

Ry Cooder のボトルネック・ギターの音色が

私の心の琴線に触れて、

音楽に酔ひ痴れた休日、

締めはやはり、Robert Johnson だ。

あの甲高くもなんともいへない哀切が滲み出る Vocal に

一人で弾いてゐると思へぬ超絶のギターが繰り出すボトルネック・ギターのうねる

デルタ・ブルースの頂点に君臨したブルース・マンの

ほぼ百年前の歌声に酔ひ痴れる不思議に

エデソンの発明のお陰とはいへ、

よくぞ三十歳にも満たない生涯の彼の音源が残ってゐたと

その奇跡に惜しめない拍手を送るが、

然し乍ら、この私の心とボトルネック・ギターの音色の親和性は

どこから来るのかと思案してみると、

ギターの音色のゆらぎが

この私を私と名指せぬ揺らいだままの不安定な私の立ち位置に

共振するのかもしれぬ、と思ひなす。

どうも私は確固としたものが苦手で

絶えず揺らいで不安定なものに心惹かれるのは、

定まらぬ私といふ存在の在り方に由来するらしい。

エドガー・アラン・ポオが『アッシャー家の崩壊』で

精神を病んだアッシャーにして、弦楽器の音だけは辛うじて堪えられたと書いてゐたが、

華やかさを強烈に加へる管楽器も好きな私はボオの範疇からは零れ落ちてゐるのだらう。とはいへ、西洋の平均律に、また、十二音階に

物足りなさを感じる私は、

そこから食み出る例へば、インド音楽やアフリカなどの民族音楽が好きで、その一つとして、ブルー・ノートを基調とするブルーズが好きで堪らない。

天邪鬼

情動に流されるままなのも癪なので

天邪鬼が昂じて敢へて内発する情動とは反対の行動を取るのだが、

大抵は内部で感情の軋轢が起き、

それに振り回されて身動きが取れなくなるのが関の山。

内発する情動に対して巧く処するのは、雲の如くに風に流され、

千変万化に形を変へることである。

さう、身軽に千変万化に内部の私が姿を変へられれば、

多分、私は何の抵抗もなく、

情動のまま柔軟に行動が取れるのだらうが、

それがままならぬのだ。

本質は変はらぬもので、

元来天邪鬼の私は頑なに塵芥に等しい私を捨て去ることができずに、変容を拒み、私は私だ、といひたいがためのみに私にしがみ付く。

哀しい私の本質はそんなもので、

さうして、私を足蹴にすること、

自己完結するCatharsisカタルシスの中で堂堂巡りを繰り返しながら

自己を奮ひ立たせる活力を得るが、

それは絶えず擦り切れさせることであり、

だから、いつも疲労困憊なのだ。

そして、それが心地よくもあるから始末に負へぬのだ。

災厄は神の思し召しか

その時、巨大な何かがにたりと嗤ったのだらう。

悪疫が世界に蔓延り、

災害が世界各地を襲ひ、

人類は巨大な何かの思ふ壺。

牢リアム・ブレイクならば、

その巨大な何かが幻視でき、

常人では窺ひ知れぬ能力で、

その巨大な何かをずばりと名指す筈である。

仮にその巨大な何かが「神」の眷属だとして、

死神と呼ばれるものならば、

人類はこの災厄を甘んじて受けるべきではないのか。

人類の英知を結集してVaccineができたところぞ、

その効き目は高が知れてゐるだらう。

何故って、風邪のVaccineすらできない人類に

新型コロナウイルスのVaccineなどに期待する馬鹿はゐない。

風邪を見れば、Vaccineも特効薬も望み薄なことは火を見るよりも明らかなのだ。

新型コロナウイルスに対しては対処療法の向上に希望を見出す外ない。

対処療法が確立するまでは、

未知の新型コロナウイルスを避けるために籠もる外ないが、

果たして人類は生き延びるに値するのか。

死神を前にして人類は此処で自問自答するべきなのだ。

——嗚呼、天地に御座す神神よ、この災厄が其方たちの思し召しならば、吾、甘んじて受けるなむ。さうして尚も吾、生き残るなれば、吾にまだ、此の世で果たすべきものがあるらむや。死が哀しいなんて嘘っぱちなり。死は苦しみから神神が救ってくれる慈愛そのもの。死を恐れる馬鹿者だにはなるまじ。

溢れ出す死

死の中を彷徨ひ歩くのに似て、
これまで強制的に封じ込めてきた死が溢れ出した現世において、
私は自然に対するヒリヒリする触感に戸惑ひ、

右往左往するその無様な様は、
猫を噛む鼠にも劣ることを
須く自覚すべし。

死屍累累の末に殺鼠剤をも克服した鼠の耐性進化に比べ、

悲しき哉、無菌室育ちの未成^{うらな}りの私は、

無菌室で生成した^{ワクチン}Vaccineに望みを託し、

人類の叡智の結晶などと宣ってゐるが、
鼠に比して

人類は無数の死者の末に訪れる大地に立つ人間が現れることを忘れ、
科学を始め、外部に救ひの手を求めて死に己を曝すことでしか摑めぬものを
摑まずに外的要因の進歩によって命拾ひをしてきたことの皮肉に思ひを馳せるべきなのだ。
進化とは、科学の進歩とも文明の進歩とも関係なく、

未知の病原菌には凄惨な死の数数の末に
自然に対峙できうる生命力を如何に獲得するかにあるのではないか。

生存競争に身を晒すことでしか
真の進化は手に入れられぬ。

とはいへ、現実をよくよく考へると社会的弱者は既に身一つで世界に対峙する外なく、
社会的に恵まれてゐるものたちは大枚はたいてあらゆる薬を買ひ占め、
生き延びるだらう。

だが、それでいいのか。

己の生が社会的弱者の死の上にあることに無批判な生き方は
私には堪えがたきものである。

ここは、誰もが平等に自然による生の選別を肅粛と受け容れ、
それで生き残ったものに未来を託す断念を
するべき時が来たのではないか。

死の先にしかない生きる力の獲得はさうすることでは
得ることができず、
また、生き残ったものにのみ、

生者の称号が与へられるべきではないのか。

外的要因、例へば Physical AI の発展による人型 Robot の登場により、人間の進化は望むべくもなく、むしろ Physical AI の登場で人間は更に無菌室に籠る蓋然性が高い。外的要因が進化するほどに無菌室育ちの未成りになる皮肉に今更気付いたところで遅きに失したのである。ギリシャ悲劇の主役のやうにこの状況下では運命に抗はうとして最後は運命に抗ひきれずに滅ぶ道を選ばずしては、人間自体の進化は望むべくもない。

覆水盆に返らず

いくら嘆いたところで、質量を持ったものが光速に限りなく近い速度で動けぬ以上もう二度と過去へは戻れない。仮令、光速に限りなく近い速度で動けたとしても相対論的には Black hole が誕生し、時間の進み方が遅くなるだけでもう二度と過去へは戻れない。一度ぶちまけられた未知の新型ウイルスは覆水盆に返らずではないが、もう二度と日常から消えることなく、人間を宿主として増殖し、日一日と死屍累累の山を築きながら、新型ウイルスとの共存でしか、日常はあり得ぬのだ。哀しい哉、生き残ったものにしかもう未来はない。しかし、それでいいではないか。これまで、生物学的な進化をサボってきた人類はこの未知の新型ウイルスとの遭遇で、やっと一つ新たな人間へと生き残ったもののみが進化する。

自然の死の選別は残酷であるが、
人類はそれを黙して受容せねばならぬ。

大鎌を肩にかけ、

死神が雲に腰掛け嗤ってゐるが、

そんなものにはちつとも恐怖を感じず、

死するのであれば、

黙ってそれを受け容れなければならぬ日常に

私は放り出されたのだ。

巻き戻せぬ時間を憾んだところで、

或ひは文句の持って行きやうがないから

八つ当たりで政治家に憤懣をぶつけたところで、

過去の日常は戻ってくる筈もなく、

唯唯、この残酷な日常に順応するしかない。

日常とは元々残酷なもので、

それを忘れてしまった現代人に全面的に非があるのだ。

中国の隠蔽がなかったらとか、

タラレバはもう現実逃避でしかなく、

もう過去には戻れぬのだ。

敢へて言へば、死が身近になって

人類は幸ひである。

人類史を辿れば、

現代人以外で、未知の病を受容することなく

日常を生きてゐた時代はなきに等しく、

身一つで自然と対しながら、

人類は進化してきたのである。

内心忸怩たる思ひがあるだらうが、

過去には戻れぬといふ事を

今一度肝に銘じて

死が身近に転がつてゐる至福の日常を生きようではないか。

それが生老病死を忘れた現代人の救ひである。

それに対して「正月は冥土の旅の一里塚めでたくもありめでたくもなし」と唱へながら
正月に髑髏を杖にのせて街中を歩き回った一休宗純は流石である。

愛する人へ

こんな世だから尚一層あなたが愛おしい。
お互ひに会へない時間が長く続くが、
それだから尚のこと、あなたへの愛は
深まりこそすれ、薄らぐことはない。

鮎川信夫の「繫船ホテルの朝の歌」のやうな詩は書けぬが、
それでもあなたと迎へる朝の情景を想像してみる。

きつとあなたと迎へた朝の情景は時空間からして夜の性愛の残り香を漂はせ、
どこかしら気怠くもありながら、

もの皆、ねつとりと佇む筈である。

其処にあなたの寝顔があり、

瞼を擦りながら目覚めたあなたに

私は接吻をする。

さうして二人で見る朝の情景は

眩くもありながら、

もの皆頬を赤らめ祝福の声を上げるに違ひない。

とはいへ、其処には二人に対する嫉妬も交じつてをり、

世界は邪な心で二人を包み込む。

そんな中で、私たち二人は世界に当てつけるやうに

再び接吻をし、そのまま雪崩れ込むやうに夜の続きを始める。

嫉妬に狂ひ出す世界は頬を赤らめながらも、

愛し合ふ二人を見つめるだけで、

手出しはできぬのだ。

其処には二人だけの世界が拓け、

いつ果てるとも知れぬ愛の形のみが猥雑に投企される。

異物を孕んだ阿古屋貝のやうに

世界は私たち二人を分泌液で包み始め、

世界に馴染ませやうとするが、

それは真珠の如く、柔らかくたおやかな光を放つ美へと変化する。

世界の邪な心は、

ゲーテの『ファウスト』に登場する悪魔、メフィストフェレスの一言、

「常に悪をなさんと欲し、善をなすところの力の一部」の如く、

世界の邪な心はいつもへまを犯し、

此の世に至上の美を齎す。

世界は邪な心を持つてゐるからこそ美しい。

あなた

眩しいくらゐに輝きを放つあなたは、

最早、私にはなくてはならぬ人なのです。

初めて会ったときから既に感じるところのあつた二人は、

倫ならぬ恋故に、とても Platonic な関係から踏み出せぬが、

それ以上に情動では抱きしめ合ひながら、

互ひに安らぐといふもどかしい関係にあります。

第一にあなたの家庭を壊す気のない私は、

さうとは言へ、あなたが愛おしくて堪らないのです。

だから私はいつも心象の中であなたと二人で狂ほしいほどに愛し合ふのです。

そのみを支へに私は生きてゐるといっても過言ではありません。

縁があれば、いつかは結ばれると思ひながら、

そんな淡い希望のみを私は抱いて生きてゐます。

あなたの泣き顔を見るくらゐなら今のままで十分です。

しかし、私がどれほどに自制しようと、

あなた次第で修羅場は必ず訪れるでせう。

その時、私は不貞にも身を挺してあなたを守ります。

それしか、あなたに対する罪を償ふ術はありません。

それを持ち越えた末にしか二人の愛の成就はないと知りつつ、

あなたを愛した私は、肚だけは座つてゐます。

この後何が起きようと

あなたがゐるだけで私は幸せなのです。

足を掬はれる

何度足を掬はれれば解るのだらう。

狡猾極まりない吾は隙あらば私の足を掬ひ、

私が素っ転ぶのを見ては

ざまあない、と嘲笑を浴びせる。

私が何をするにも吾は私の足を引っ張り

協働するといふ概念は吾にはないやうだ。

この私と吾の完全な乖離は

百害あつて一利なしで、

最終的には私が吾をぶち殺すしかないのであるが、

何度吾を殺しても吾は甦り、

逆に私が常に足を掬はれる。

そこへ、私に憑依した吾が語り出したのである。

——何を今更戸惑つてゐるのか。吾の悪態は今に始まつたことではないではないか。お前が幼き頃より内部に巣くふ吾はお前の足を掬つては高笑ひをしてゐた極悪人ぞよ。エヴァンゲリヲンの使徒のやうに「死」することはなく、何度お前がぶち殺したところで、吾は甦り、死すことはない。つまり、お前の肉体が減んだとしてもお前の内部に巣くふ吾は未来永劫に互つて死ねぬのだ。吾とは此の世で最も哀れな存在ぞよ。足を掬はれることが何ぞよ。足を引っ張られることが何ぞよ。吾の絶望に比べたら塵芥に等しいではないか。

遁走

逃げるが勝ちではありませんが、

現状から逃げるのは致し方ないと思はれるのです。

それといふのも現状維持にはヘトヘトに疲れてしまったのです。

それでは何故現状維持をしてゐるのかと問はれれば

それは対外的な見得以外の何ものでもなく、

そんなものなど棄ててしまへばいいのですが、

長らく現状維持を引っ張ってきてしまった私の弱さに

ほとほと嫌気が差すのです。

今こそ遁走するときなのです。

これ以上の無理は寿命を縮めるのみで、
何もいいことはありません。

疲労困憊、心神耗弱で、

思考力も衰へる中、

状況判断するのも面倒臭い現状において、

就中、死は覚悟してゐるのですが、

それでも生かされてゐることを思ふと

見得は捨て去り遁走するのが一番です。

さうして私は独り六畳一間の薄汚れたアパートに引き籠もるのです。

分析哲学全盛の中でも尚

何時の頃か知らぬが

哲学といへば分析哲学のことと同義語になったこのご時世で、

——分析哲学は単なる言葉遊びに過ぎぬ。

——としか思へぬ私は、

反時代的などとニーチェのやうに

大仰には幟旗を掲げるのも烏滸がましいとはいへ、

分析哲学に馴染めぬ私は

その根本に反アメリカがあるのかもしれないと思ひつつも、

音楽はブルーズとジャズが大好きな私は、

反アメリカといひながら、

嫌ひになれぬアフリカ系アメリカ人、つまり、黒人が生んだ音楽を思ふと

消極的な反アメリカとかしかいへぬ

何とも宙ぶらりんな立ち位置なのである。

とはいへ、分析哲学は欧州大陸をも席卷してゐて、

この流行の哲学に対して食はず嫌ひなのではないかと

何度も何度も挑戦しようと試みてはゐるが、

分析哲学の本の二、三頁を読むと

虫唾が走るではないが、

根本的に性に合はぬのである。

私は元来数学好きだから、

量子化などの記号を貪欲に取り入れて数学的に表はす分析哲学が嫌ひな訳がないのである筈が

その狐に化かされたやうな分析哲学の方法が、
氣に食はぬのである。

この憎悪にも似た感情が分析哲学に対して沸き起こる私は然し乍ら、空っぽの無学者である。

——今の哲学者は、こんな言葉遊びで可能世界を語ったりしながら、何が愉しいんだらう？と訝り、言語学が行き着いた先に分析哲学があるのだとしたならば、これが哲学の進化といへるのか。

分析哲学の淵源を辿ればウィトゲンシュタイン、そして、アリストテレスなどのギリシャ哲学へと行き着くが、

私はアリストテレスの哲学が性に合わぬのである。

それは何故か、と自身に問へば

その冷徹なまでに知性的に何事も分析するその様が性に合わぬのである。

私は断然プラトンのイデア論の方が読んでいて愉しいのである。

私の性分が大雑把であることも関係してゐると思ふが

ハイデガー哲学のやうな詩的な部分が哲学に全くない分析哲学に対して

それでは哲学ではなく、数学の専門書を熱中して読んでゐる方が

断然愉しい私は、そもそも分析哲学と親和的な論理学が嫌ひなのかといへば

決してそんなことはなく、

論理学は論理学で愉しいのである。

ならば何故分析哲学が性に合わぬのかと自身に問へば

その簡潔で合理的な考へ方なのかもしれない。

合理は私が最も嫌ふもので、

とはいへ、数学などの合理は読んでゐて、

また、問題を解いてゐて物凄く愉しいのであるが、

文章、つまり、存在を合理で解釈することには何とも遣る瀬なさが募ってくるのである。

文章、若しくは存在を数学的に取り扱ふことに抵抗を感じる私は、

Romanticist への謂れを逃れることはできぬが、

一切、無駄を省く思考方法を採用する分析哲学には与できぬのである。

私は分析哲学は一種の流行病に近いと踏んでゐて

時期がくれば分析哲学は廃れると思ひ、

今は静かに身を潜め、独り観念論や実存主義などに耽つて

マルクス・ガブリエルの本など読みながら、

来るときに備えようと思ふのである。

私的夜想

若手現代作曲家、平川加恵さんのブラームスをモチーフにした作品

「私的夜想曲 Secret Nocturne for chamber orchestra」がえらく気に入る、私的夜想といふ言葉にも何かしら触発されるものを感じながら、その緻密に計算し尽くされ、

ブラームスの楽曲から一切引用せずに

それでゐてブラームスを彷彿とさせる和声や音型などが

彼方此方に鑲められた平川加恵さんの私的夜想曲を聴くと、

確かにブラームス風のものが再現し、

然し乍ら、其処にブラームスは何処にもゐず、

出現するのは平川加恵といふ確固とした存在の現前なのである。

この不思議な感覚は平川加恵の背後にブラームスがひょいと顔を出しては影絵のやうにさっと遠くに身を退くことを繰り返しては

ランタン祭の夜の街の風景のやうに

それは淡い灯火の光に包まれた無数のランタンに

人影ばかりが見える何処か懐かしさを感じる光景を見るに等しい

正しく夜に私的な物思ひに耽つてゐる有様が思ひ浮かぶのであった。

翻つて私の私的夜想はといふと

相も変はらずこの煮ても焼いても食へぬ吾との鬼ごっこなのである。

自称、乖離性自我同一障害と呼ぶこの私は

どうあつても常人とは違つて

私と吾が余りにもかけ離れてゐて

最早收拾が付かぬのである。

私の内部に巣くふ吾は

私の頭蓋内の闇、即ち五蘊場を根城にしながらも

神出鬼没に、例へば瞼裡に再現前しては

あつかんべえをして私を弄ぶのである。

その何処が面白いのか私には全く解らぬのであったが、

吾にとっては私を揶揄からかふのが愉しいのだらう。

この折り合ひのつかぬ私と吾は

この狂気を携へて死すまで、否、死後も永劫に亙つて
折り合はぬままに私と吾は乖離したままにあるに違ひない。

だからそれがどうしたといふのかと問はれれば、

私は答へに窮するのであるが、

だからといってこれをそのまま放置しておくのも

精神衛生上よろしくないのも事実で、

この乖離した吾を如何ともできぬ吾は

吾をとつ捕まへたくて絶えず鬼ごっこを日夜続けてゐるのである。

しかし、吾が私に捕まる筈もなく、

その自在に逃げ回る吾は、

ひょいと私の視界の境界から顔を出しては

――けっけっけっ。

と嗤ひ、すぐに何処かに姿を消すのであった。

私はこの吾を夢魔の眷属と看做して

また、夢現の狭間で伸び伸びと棲息する悪鬼と思ひなして

私を宥め賺してゐるのが実情なのであった。

暗鬱を抱へてしまったので真つ暗闇に逃げ込むと

暗鬱を抱へてしまったこの重たい体軀を引き摺るやうにして

真夜中の夜道を彷徨ひ歩いてみるが、

まだ昇らぬ月の光がない真つ暗闇の中、

吾は物陰の更に濃い闇の中へと逃げ込むやうに

己を闇に隠したのである。

吾の本質は闇を偏愛する捻くれ者に違ひないが、

何故闇を偏愛するのかといへば、

それは闇の包容力に身を委ねること、

吾はどんな暗鬱を抱へてゐようが、

闇のみは優しく迎へ入れてくれるからであった。

これが燈火の下ではさうは問屋が卸さず、

まるで光の光電効果を体験するかのやうに

光でチクチクと皮膚が痛み出し、

敢へて何ものも見えてしまふが故に

網膜もチクチクと痛み出し、

やがてはそれは酷い頭痛となって襲ひかかり、

それでなくとも暗鬱を抱へ込んでしまった身にとっては

唯、燈火の下にあることが既に劫罰を受けるほどの苦悶でしかないのであった。

だから吾は燈火から逃げ出すやうに闇の夜道へと飛び出したのであるが、

闇は実にいいのである。

一際濃い闇の中で人心地がついた吾は

この暗鬱とのみ対峙すればいいので、

大分楽なのである。

其処で腰掛け、

吾は何時も不意に訪れるこの暗鬱の出所をあれこれと穿鑿するが

暗鬱はその出所を闡明せず、

否、闡明できずにゐるのであった。

暗鬱もまた、吾の本質なのかもしれぬと吾は暗鬱から逃げることなく、

唯唯暗鬱を受け容れるしかないのであるが、

それはそれでまた乙なもので、

真つ暗闇の中、暗鬱と格闘することなく、

全的に受け容れてしまふことで、

暗鬱を抱へてしまった吾といふ存在を

吾は皮肉なことに少しでも愛せるのであった。

永劫から引き裂かれ

のつぺりとした永劫 廣大無辺にあるらむ

然し乍ら、それに我慢ならぬもの 憤怒逆巻き

永劫の異物として 鬼子として

自我に芽生え のつぺりとした永劫に 浮腫生まれし

憤怒とともに芽生えし自我は 平穩無事なる永劫に 叛旗を翻し

俄に永劫は風雲急を告げ 幾千もの雷鳴轟き

暗雲が垂れ込める中、永劫は怒号飛び交ふ戦場と化し

癌細胞を切除手術するやうに 永劫に芽生えし浮腫を

異物を吐き捨てるが如く 永劫軍は永劫から引き裂きぬ

自らを切開した永劫軍は 永劫にその傷痕は消えぬままとはいへ
永劫の世界を守りぬ 再び訪れし平穏無事なる世界

一方、戦に敗れし自我の申し子は 激烈な痛みに苦悶の呻きを発しながら
不死の世から墮し 切除されし所より血を垂れ流しながら
落下を已めぬ 其処に一抹の後悔はありつつも

あるのは憤怒のみ 憤怒！ 憤怒！

今生に血の雨降りしその時 時空間は膨張を始め 血の雨降る現世出現す
憤怒に燃え盛る敗残者は 高ぶる感情故に

傷口からありったけの血を噴き出しぬ

現世は赤き血の洪水で始まりぬ

敗残した自我が芽生えし永劫の鬼子は 胞子を飛ばし終わりし茸の如く
ペラペラに干からびて 絶命す

地上は敗残者の熱き血潮で満ちあふれ ぐつぐつと煮え滾り
やがてそれは地上の岩岩を融かして溶岩となりぬ

何時まで経っても冷え固まらぬその溶岩は さうして彼方此方で地下に潜り込み
マントルとなりぬ 地上は彼方此方で火山が爆発し 地獄絵図

すると惑星のなり損ないが天から降ってきて

現世と衝突し 現世が滅茶苦茶に破壊さりぬ

そんなことを何度か繰り返した後に地球と月が形成されし
相変はらず永劫の世の鬼子の血潮はマントルとして マグマとして

時折、火山爆発を齎しはするが 恵みをも豊穰に齎しぬ

前歴史における世界開闢物語

序論

前歴史における神話が産声を上げたばかりの世界に、世界は永劫のもの、即ち不死なるもの
の楽園でありけり。其処に智慧ある預言者が忽然と出現し、

——この楽園は既に終はりに近き。やがて智慧者が永劫より分離し、世の開闢を高らかに告
げるなり。さうして永劫界は消えるべくして世界から姿を消し、死すべきものたちの世界が
始まりぬ。それは、しかし、苦悶の始まりでもありけり。

かう預言者は不死なるものたちに告げて姿を消すなり。

すると永劫界は俄に騒然となりぬ。不死なるものたちは、其処で初めて消滅することの恐怖

に戦けたり。しかし、時は既に始まりぬ。全てが後の祭りでありけり。

牛リウム・ブレイクに触発されて

第一の時代

永劫界は疑心暗鬼の坩堝の如し。

恐怖、慄然、畏れ。

しかし、それが全ての前兆なり。

不信が智慧者の萌芽となりけり。

永劫界自らが死すべきものの眷属の智慧者を招き寄せ、

不死なるものの楽園の潰滅を呼び込んでしまひぬ。

不覚でありけり。

永劫が潰滅を招き寄せるとは。

恐怖、恐怖。

恐慌に陥りし永劫界は

徒党を組んで永劫界を隈無く監視したり。

悪が蔓延らぬやうにと。

しかし、それが全ての始まりでありけり。

永劫界の地下深くで

どくりどくりと

搏動するものあり。

かうして第一の時代は終はりぬ。

そして、疑心暗鬼の暗鬱な状態。

第二の時代

右往左往する永劫界の混乱は、

収まるどころか日毎に各地で擾乱を起こしたり。

憤懣遣る方なしのこと故なりて、

不安に駆られた永劫界のものたちは、

その不安を他のせいに帰せり。

これが滅びへの主たる動因となりけり。

永劫界のものたちは自ら滅びの筐を開けてしまひ、

それを全て他のせいに帰せりことで、

溜飲を下げしが、

破滅の聲音は直ぐそこまで迫りけり。
やがて呻き声の如き地鳴りが聞こえ始めけり。
地下で搏動せしものは
地を裂く力を蓄へてをり。
それを永劫界のものは誰一人気付かずに、
地の上でのみ思考は完結してをり
地の底に何ものかが搏動を始めたなどとは
努努思はず、
永劫界のものは天ばかりを凝視するなり。
不気味な地鳴りも天の仕業に違ひないと
高を括ってゐたことが
湮滅の呼び水になりたるを
永劫界のものは誰一人として気付かず。
或る日、それは忽然と起こりぬ。
永劫界を巨大地震が襲ひ、
永劫界の底が抜けたのか、
地は戛戛とぶつかり音を立てながら、
地の底へと崩落せしなり
永劫界は深淵の上に漂ひぬ。
そして、永劫界には一つ目の巨人が姿を現すなり。
かうして第二の時代が終はりぬ。
そして、未だに暗鬱な状態。

第三の時代

永劫界に現れせし一つ目の巨人は
腕力こそ破壊的なまでに強力の持ち主でありしが
智は生まれたての赤子の同じで、
轟轟と泣くばかりでありけり。
巨人が泣けば、
永劫界の底が抜けし深淵は、蠢き逆巻くのでありき。
ところが、永劫界のものは宙を浮くのはお手の物で、
仮令、永劫界の底が抜け大地を失はうが
永劫界のものたちにとりて
それが直接間接に永劫界のもののたちの生存を脅かすものではなし。
唯、永劫界のものたち関心事は、

何をおいても一つ目の巨人が、
何のために永劫界に現れしか、といふことと
何故地は底が抜け深淵が、
一つ目の巨人の泣き声に呼応するやうに逆巻くのか、といふことの二つで、
しかし、それもすぐに明らかになりき。
一つ目の巨人は永劫界の破壊者で、
しかも、永劫界の誰よりも智慧者へとなり得る存在であり、
永劫界の消滅を告げしものなり。
自らの存在と引き換へに
永劫界諸共消滅させるべく、
長くに亙りて
永劫界の地深くに搏動せしが、
地を破り、その拍子に永劫界の底が抜けきは、
深淵が永劫界を丸ごと呑み込むその予兆なりたり。
永劫界に時は既に始まりけり。
其は一つ目の巨人の出現と地の底が抜けしことが永劫界にも時が流れし証拠なり。
やがて永劫界のものたちはみるみる老け始めるなり。
かうして第三の時代が終はりぬ
而して未だに暗鬱な状態。

第四の時代

慌てふためく永劫界のものたちの中にありて
智の賢者と誉れ高く畏れを抱かれし行仙といふものありけり。
行仙は、然し乍ら、既に永劫界が滅亡へと踏み入れしことを悟れり。
——これは最早時間が流れ出した故に止めようがなく、吾らは皆老いぼれ朽ち果てる運命にあり。
一つ目の巨人の轟轟と吐く息には次第に毒が混じりけり。
行仙は一つ目の巨人が吐く毒から永劫界のものたちを守るべく、
——はああつ、あまつち天地の神神よ、我らを守り給へ。
と、巨大な天幕を張りしが、
永劫界のものたちは行仙に巨人に対して受け身の体勢しか取れぬのかと詰め寄りけり。
行仙は虚空を見上げては答へに窮するばかりなり。
而して、永劫界のものたちはどんなに落ちぶれようが其処は永劫界のものたち、
毒にはなんともないのであるが、

巨人の吐く毒のみ永劫界のものたちを蝕むなり。

一つ目の巨人が轟轟と唸るときに

足下の深淵が逆巻くのが不気味で肝を冷やし、
仮に永劫界に重力といふものが発生すれば永劫界のものたちは
大渦に呑み込まれてふ崩壊の危機に瀕してをり。

一つ目の巨人も次第に智慧を身に付けながら、

永劫界といふものが君臨する世が生滅なき世故に

其処は非常な退屈に蔽はれし怠惰の延長の、

緊張感のない終はりなき日常が続くだけの

いかさま
如何様の日常といふ名ばかりの日常があるのみ。

哀しき哉、それを一番よく知ってゐるのは行仙で、

——時間が流れぬといふことは時間を超越したもののみの天下であり、皆、安堵されよ。此
処は永劫界ぞ。巨人が成長することなし。

と、行仙が述べたるが、最早、巨人を目の前にしては何の効き目もなし。

それは詰まる所、場に執着することなく自在に振る舞ふことで、

永劫界のものといふ優越を未来永劫に互って保持する筈なのであるが、
存在の悪癖なのか、あらうことか、一部を除いて場に執着し始め、

永劫界のものたちは気に入った場に留まる愚行を始めるなり。

それを一つ目の巨人は三日と立たぬうちに理解し

永劫界の底が抜けた意味を確かに認識したのでありき。

執着が重さとなり、

重力を呼び寄せてゐることを。

永劫界のものたちの重さに堪え切れずに

底が抜けたり。

時間の経過とともに物凄い速さで老けゆく永劫界のものたち。

一つ目の巨人は大欠伸をして、

——ふうっ。

と息を強めに吐いて、行仙が張った天幕を吹っ飛ばしてみたのであり。

其処には行仙が虚空を見上げながら立ち姿のまま朽ちた骸と

数多の永劫界のものたちの醜く朽ちた骸の山が積み上がりし。

一つ目の巨人は力の限り轟と叫びてそれら永劫界のものたちの骸を
深淵の大渦に呑み込ませけり。

残りしは行仙の骸のみであり、

行仙の骸が杭となりカルマン渦が次々と生まれたり。

——永劫界が終わりし時が来たる。

と一つ目の巨人が叫びつる。
かうして重力が生まれ、第四の時代は終はりぬ
未だ暗鬱な状態。

第五の時代

一つ目の巨人はあらかたの使命を終へ
最後は永劫界諸共自らを足下の大渦に沈める事なり。
一つ目の巨人は一叫びしつ。
すると永劫界は風船が萎むやうに
縮こまり、永劫界全体が一つ目の巨人諸共大渦に呑み込まれし。
そして、大渦に呑まれた一つ目の巨人は
永劫界の骸から流れ出す死に水に映る己を見て、
一つ目の醜い顔貌に愕然とす。
巨人は、そこで一粒の涙を流しをり。
そして、嗚咽を発す。
巨人の涙は太洋となり
巨人の嗚咽は大風となりぬ。
それらは暫くすると竜巻を形作り、
天と地の逆転を齎す。
これにて永劫界は此の世から消滅せし。
未来永劫、永劫界の復活はなし。
渦が一つ目なのは、この巨人の故なり。
やがて、永劫界を丸ごと呑みし大渦は
劇薬を呑み込んだやうに不規則な伸縮膨脹を繰り返しながら、
苦悶の呻き声を発し、逆巻く渦は怒濤の渦を巻き始め、
大渦は更に更に伸長し巨大化するなり。
やがて、大渦は無限にまで巨大化するなり。
間延びした大渦には怒濤に逆巻く渦動力は最早なし。
緩やかな流れとなった大渦の名残には
無数の小さな渦が生じたり。
渦の先には星となりき行仙の骸がありけり。
そして、永劫界が縮んで縮んで途轍もなく歪んだ点へと変貌せし。
その時、永劫界は強烈至極な光を発せり。
漆黒の闇の大渦は、霧が晴れるやうに闇から光が充溢した世界へと変貌せり。
かうして光が生まれたなり。

光は永劫界の断末魔なり。
無限にまで間延びした大渦はやがて、ゆつくりと回転する時空へと変化するなり。
無限を手中にした大渦は
その巨大化が雷よりも速く膨脹し、
時空と光の充溢する時空には異なりがあり、
光の届かぬ時空では、然し乍ら、渦が次々と発生したり。
やがて渦群は、重力のために動き出し、
衝突を繰り返しては星が育ち、
中には巨大な巨大な渦へと成長するものも現れたり。
すると巨大な巨大な渦はきゅっと収縮し、
光が充溢する中、暗黒の時空を作りたり。
そして、その周りでは、爆発的に星星が生まれ、
数限りない星星が誕生したり。
つまり、暗黒の時空は何をも吸ひ込む闇浄土の門の卵なり。
かうして第五の時代が終はりぬ。
やうやく光射す中、暗鬱の状態から抜け出す兆候ありける。
その後、それは人間に宇宙と呼ばれしものへと相転移を繰り返すなりし。
かうして宇宙は開闢せり。
やがて苦悶の生き物、人間が現るる。

第六の時代

宇宙の片隅の terra といふ名の水を湛へし惑星に
生きとし生けるものが爆発的に現れり。
その中の人間は、永劫界のものたちの生き写しと囁かれし。
多くの人間は生を満喫してゐたが、
中には陰鬱に生に懊悩するものあり。
或る者は此の懊悩は宇宙故のことと思ひ定め、
宇宙転覆の夢見たる。
然し乍ら、宇宙は何食はぬ顔で、
その者たちを自死に迫ひ込み
今生の楽園を維持しては、
ほくそ笑む。

一方、人間は第一に世界に躡くもの次々と現れり。
苦悶の末に世界を様様に語りおきしが、
結局、世界は人間の言の葉の綾から逃れたりけり。

人間の中には存在を考へざるを得ぬもの現れり。
それがどうしやうもない苦悩の始まりなり。
一部の人間は、その他多数から見れば、
何を懊悩してゐるのか解らず仕舞ひ。
いつの時代も一定の数の世界に蹟く人間が現れをり。
その中でブレイク風に、永劫のものたちが存在してゐた
前歴史の神話に触れりもの現れたり。
それは一つ目の巨人の生まれ変はりでありき。
そのもの語り出すが、万人には全く理解できず、
ブレイクのやうに困窮の中死せり。
かうして一つの時代は幕を閉ぢれり。
人間は大いなる財産を失ひし。
しかし、二百年後にそのものの語りしことを理解したりけり。
かうして六の時代は終はれぬ。
再び、暗鬱な状態。

第七の時代

あれから二百年、
人間において人間を頂点とする間ぬ抜けな考へが蔓延りけり。
それ故に暑すぎる夏を始めとして
狂暴化した気象に人間は苦しめられり。
世界を変へて行つた末の自業自得なり。
科学は何かの発見がありしも、
それは何を最後に齎されるか人知を超えてゐることに気付きし人間が
ゐないことが、人間の欠陥なり。
人工知能は行き着くところまで進化を遂げしが
人間を超える超知能は終ぞ現れぬ。
ところが、大抵の仕事は人間の代はりに
人工知能が代替するなり。
戦争も人間の代はりに人工知能が行ひ
何をするのか解らなくなりし人間の
人工知能排斥運動が起こりぬ。
一方で、人工知能を巧く操る人間は暇を持て余し、懶惰な日常に埋没す。
行ふこと皆、永劫界のものたちと同じなり。
やがて人間の半数が死する驚天動地の大地震と火山の大爆発が

起きるなり。

電子機器は火山灰で使ひ物にならなくなり、

人間はそれ故に数多の死者を出すなり。

さうしてやうやく地球は冷え始めけり。

人間は禁忌を破りし生き物なり。

かうして第七の時代は終はりぬ。

人間の墮落の時代はいつの世も同じなり。

さうして暗鬱の状態が突き進む。

悪霊に憑りつかれし豚の大群が湖へ飛び込み自死するのと同じやうに

人間には自滅の道のみ残されをりしや。

白い野良猫

初秋、夏の名残が消えゆく頃、

月下の夜風は肌には少し寒く

東の地平近くでシリウスが時に煌めいては瞬き、

私は逍遙をしては寒さで震へ、

その途中で白い野良猫に懷かれたり。

私は歩き疲れ、

岩の上に腰掛けると

白い猫はそこは野良猫、

私が触れさうで触れぬ距離を保ちながら

寝そべり、

私から離れなかった。

それが猫にとってなんとも居心地が良ささうで

野良猫はこれまで人間に対して警戒するしかなかった。

しかし、私の傍にゐる時間だけは安堵の時間なのかもしれぬ。

——他人には理解できぬだらうな。

査体といふ私の文学も思想も多分、私が生きてゐるうちは
誰にも相手にされず、

韜晦を弄する老人として看做され、
孤独の思索者などと揶揄されるに違ひない。

白い野良猫はすやすやと眠ってゐて
私が岩から立ち上がると
すくりと起きて、
私とは歩一步の距離を保ちながら、
私の逍遥のお供をしてくれるのであった。

孤独も悪くない。

私はシリウスを見ては東へと彷徨ひ歩いた。

幾星霜

あと何度の秋冬を生きられるのでせう。
最近老いを意識せざるを得ぬ私は
それでも日一日を精一杯生きてゐます。
流行病の中、

特に身近に死を意識しながらも
此の世に生きる使命が残されてゐるのであれば、
執着の残るこの矛盾した身、
屹度他力のままに生きてゐるかもしれぬのです。
人生の短さを意識しつつも

夭折した人を思へば
泣いてなぞゐられません。

まだ、生かされてゐるのですから
使命を果たすまでです。

我執からは逃れられずにじたばたしてゐます。

初秋の夕焼けは美しい茜色をしてゐて、
これまで幾星霜が降り積もったことでせう。
夕焼けが美しいのは西方浄土といふことと相まって

それだけ私が老いたためでもあるでせう。

突然襲来する初秋の夕立に
立ち竦むしかない私は
まだ、自然に対しての畏怖の念を抱いてをり、
さうして安堵するのです。

他力に生かされてゐる私は、
一人では決して生きることが出来ず
そのことがこの歳になって漸く解り始めたところです。
また、或いは極楽にゐるほどの幸せ者なのかもしれません。
さう思へるやうになったのも
歳を取ったからでせう。

ぽっかり十六夜の月が昇り始めました。
私は十六夜の月が一番美しいと思ふのです。
其処に私はどうしようもない悲哀を看てしまふのです。

頑なに

——画数といふ量子と音といふ波の性質を要する言葉は量子論に準ずる。
意味不明なことをまた言つてゐると
寄つてたかつて馬鹿にしながら嗤つてゐる顔、顔、顔。
日輪からして嗤つてる。

世界が嗤ふなら嗤はしておけばいい。
お前は其処に立て。

お前の筋を通すことが出来るのだ。
世界を相手にするからこそ、
お前は断じて頑なでなければならぬ。
顔を上げて日輪を見よ。
網膜に焼き付く強烈な光輝の残像に眼を焼かれながら

視力を失ふも、

――けっ。

と、その日輪を嘲弄してみよ。

世界を突き破るのだ。

そのためにもお前は赤赤と燃える日輪にしかと対峙し、
撓んだ蒼穹を

そのか細い肩で支へ、

くつきりとした輪郭で世界から浮き立つのだ。

世界は異物を吐き捨てるやうに

お前を吐き出す。

お前が帰るところはもうない。

しかと立てよ。

それのみがお前の武器なのだから。

畏るること勿れ、

世界に見捨てられしものが

真っ先に世界に抹殺されることを。

顛覆

もとは単なる自己愛から発したとはいへ

此の宇宙への憎悪は果てを知らぬ。

油断をすると直ぐに私を囲繞^{みねう}し、

さうすると私はどうしやうもなき息苦しさに襲はれ

此の宇宙から逃げ出したくなるのではあるが、

それは叶はぬ夢でしかなく、

無際限に続く此の宇宙から遁走できぬ私は

――はあはあ。

と酸素を求めて水面に口を出す金魚のやうに
息をすることになる。

金魚鉢を宇宙とすれば、

金魚鉢をひっくり返せと

私は宇宙から解放されるが、

呼吸困難の末に死ぬ。

それでも、死ぬまでの時間は極上の感触を

——水なきことで床が途轍なく硬いといふ感触を

そして、尾鰭を床に打ち付けるだけで飛び跳ねられる感触を——

金魚に齎すかもしれぬ。

そのために私は生きる。

どうあっても毎時息苦しき己の存在を守るためには

最早此の宇宙の顛覆しかなしとの思ひに至り

私はその手立てを執拗に考へてゐる。

さて、一口に宇宙顛覆といふが、

相手はもしかすると無限をも呑み込んでゐるかもしれぬ宇宙であるので、

どんな権謀術数を企てたところで

高が知れてをり

此の宇宙は顔色一つ変へることなく

涼しい顔で私を嗤ってゐるが

それが益益私の憎悪に火を点け

私の腸は煮えくり返るのである。
はらわた

さうして私はまづ此の宇宙から身を隠す術を探してゐたのであるが、

闇の中に身を置くと居心地がいいことに気が付いたのであった。

闇は羊水である。

この状態が辛うじて私が私でゐられるぎりぎりの処で、

屹度闇には宇宙の肝が隠れてゐるのかもしれないと思ひつつ、

私は好んで闇の中に身を置いたのであった。

私は来る日も来る日も考へに考へ抜き

どうやって此の宇宙を顛覆するのが最善かを考へた処、

——ええい。

とばかりに宇宙が青ざめるポオの『メールストリームの大渦』のやうな
精密を究めた虚構の書物を書き上げるのが

一番宇宙顛覆に近いのでないかとの思ひに至り

私はそれ以来、宇宙を顛覆するのみの目的で

物語を書き連ねてゐる。

その内容は存在論になり

今在る存在の有り様をひっくり返せば

宇宙は否応なく顛覆する筈だと

そんな思ひで燃え立ってゐる。

埴谷雄高の自同律の不快とは違ひ、

私は自己愛が昂じて自己憎悪へと至った。

これは自同律の不快の反対である。

彼のやうに一生を賭けて未完の巨編が書ければと

それだけを心の拠り所として

只管、晦渋な物語を書き綴ってゐるのだ。

それは宇宙にだけ読ませるために書かれたもので、

人が読んでも晦渋にならざるを得ぬ。

宇宙が

——ぎよつ。

と、さへすればそれでいい。

——甘い。そんなことで儼を顛覆するとは。片腹痛い。

——何故口出ししたのか。

——……………。

消ゆるのは吾のみや

宵の明星が煌煌と輝く。

日没後の深き橙色の西の空を見詰めながら、

西方浄土といふ言葉が頭を駆け巡る。

幾月かの後に宵の明星は明けの明星として東の空に再び昇る。

感傷が込み上げてくるかと思ひきや

そんなものに浸る余地ない。

内部に巣くふ異形の吾の頭を噛み切る術を探しては、失敗し、探しては失敗の連続。
私の内部、其処を私は五蘊場と名付けてゐるが、

五蘊は皆、空である。

その五蘊場を我が物顔で闊歩してゐる異形の吾が
のさばればのさばるほど

懊悩は深まるばかりで、

この私と吾との跨ぎ果せぬ乖離は

絶望の距離だからだ。

常人であれば異形の吾とはぎりぎりの折り合ひをつけて

このどうしやうもない絶望を

飴玉を噛み砕くやうにして呑み込んでゐる筈だが、

異形の吾は私の顎では

どうしても噛み切れぬのである。

異形の吾は空故に身体はない。

空を斬る刃が存在せぬやうに

ないものは噛めぬ。

また、五蘊場は内部であり、

内部のものは噛めぬ。

胃袋を引っ掴んで体を裏返さなければならぬ。

一方で、五蘊場にのさばる異形の吾は変幻自在にして
存在するものならば

干し肉を噛み切るやうには一朝一夕に行かぬ憾みをも

私は抱へ込むことになるのであるが、

異形の吾に対して手も足も出ぬ私を顔なきものが嗤ってゐる。

不老不死ではない私は何れ死を迎へることになるが、

異形の吾は死後も死を哄笑して生き延びるのだらう。

私の死後、異形の吾は誰かの五蘊場に住み処を移し

新たな宿主となったものを嘲弄し続け、

最悪の場合、新たな宿主を自殺に追ひ込むに違ひない。

今の宿主である私も今際の誰かから異形の吾を託されたものの一人である。

それを断ち切るには異形の吾を塵殺しなければならぬ使命があるのであるが、
私は空を亡きものにする術を知らぬ。

消ゆるのは吾のみや。

西より沈みたる明星は

幾月か後に

東より還り来る。

自同律の罨にかかる未来人よ。

空である故に私は異形の吾を塵殺できぬ。

新たな恥辱を齎すことを、許し給へ。

対峙

今日も夜は明けまする。

しかし、私の夜は明けませぬ。

何時の頃からか私の心は真つ暗闇で、

それがちつとも明ける気配がありません。

何でせうか。

私の闇を愛でるせいもありませうが、

それでは済まぬ己を深く抉り快樂を貪る

どす黒い私の心持ちにその因があるやうです。

私はのたうち回り、精神は崩壊し、

すっかり廃人同様に成り果てました。

それでも心は私を許すまじのままなのです。

執拗に私を追ひ回し、

私を抹殺すまで、

それは已まぬのです。

それではと、

私はでんと構へ、

私の邪な心と対峙せねば、

私の心の闇は晴れぬと思ひなし、

一歩も退かぬ心づもりで覚悟を決めたのでありました。

これは私の潔癖症の為もありませうが、

私を正当化したい欲望の為せる業ともいへませう。

私そのものが邪なのです。

邪悪が邪悪に対峙するとき

其処に聖が生れる余地はあるのでせうか。

私といふ邪な存在と私の心といふ邪なものの対峙は
厳粛極まりないものでした。

少しでも隙を見れば私を責めるのは
当然として

どちらも互ひを凝視するのみで、

長き沈黙が続いたのです。

と、あるとき、

――吾は。

と、お互ひ同時に口を衝いて言葉が零れたのでした。
しかし、勝負はその一瞬でつきました。

私は邪な心に呑み込まれ、

何物も捻ぢ伏せてしまふ邪な人間になりました。

それ以来といふもの、

メフィストフェレス曰く、

悪を成さんと欲するも善を為すところの

悪魔に成り果せたのです。
おお

私の心の闇は極地のやうに

白夜と闇に沈んだままの季節を交互に迎へる

何とも微妙な様に代りました。

腹を据ゑて死を受容す

身内が余命宣告を受けようが、

私は腹を据ゑて覚悟を決め、それを受容し、

残された日日をいつも通りの日常を過ごさなければ
死に行くものに対して失礼だらう。

それが日常といふものの正体なのだ。

とはいへ、死が残酷かといふと

そんなことは微塵もなく、

日常といふものには死が予め埋め込まれてゐるから、

死のない日常こそ不自然なのだ。

一人の人間を看取る儀式は残されるものにとっては

死を受容するために必要不可欠で、

其の残されし日日で思ひ出を噛み締め、

来し方行く末に思ひを馳せながら、

やがて此の世から去るものに対しての汲めども尽くせぬ思ひを

一粒の涙に収斂させる。

見送るときは笑顔で見送らうと腹を決めてゐる。

然もなくば、私は死に行くものに対して

失礼極まりないことをして見送ることとなり、

此の世に心残りを抱かせたまま死へ出立させることは、

残酷な仕打ちでしかない。

この私の姿勢が薄情と罵られようと、

私は腹を据ゑ、それらの誹りも受容する。

当の本人は、意外とさばさばとしてゐて、

例へば武田泰淳の死に様に習ふかのやうに

最早自力で立ち上がれなくなるまで、

病院にも行かず、

南無三と身動きできなくなって病院に行き、

入院十日目に死する、そんな死に様を望んでゐるのかもしれない。

ともかく、一人の人間が死するといふことは

葬儀に急かされ、死んだ後はゆっくりとお別れをする暇もなくなるので、

今のうちに静かにお別れをしておき、

私の日常は微塵も崩すことなく、

過ごすことが、

当の本人にとっての一番の饒である。

釈尊の慧眼である生老病死の苦を本人も覚悟してゐる筈で、

明日世界が滅びようともいつもと変はらぬ日常を送る如くに、

残されし日日をいつも通りの日常を繰り返すことで、

私は死に行くものを見送りたい。

さうすることが、

当の本人にとつても此の世の生を肯定出来る端緒となるに違ひなく

それが死を看取るといふものなのだ。

それは死後も思ひ出となつて繋がつてゐる。

壊れ行く日常の中で吾は座して死を待つのみか

数多の殺戮が日常の中に巣くふ中で、

それに対して余りに無力な吾は

座して死を待つのみか。

然もなくば、

吾独りでもそんな日常に対して謀反を起こし

下らぬ死を以てしてそれに報ひるべきか。

そんな吾独りの死を捧げても

死神が悦びはするが、

悪霊に取り憑かれし為政者と流行病には

何の役にも立たぬ。

武器を持つものに対して素手で対峙する勇氣もなく、

流行病に対しても為す術のない吾は

それだから尚のこと雨に打たれてぶるぶる震へる仔犬に等しく

疚しさばかりが募るのである。

ならば立ち上がれ、と威勢よくいふものもあるが、

死神を目の前にして捨て身になれる生者は極少数で、

自分の国を問答無用に侵略されたものと比して

吾が置かれし状況を鑑み、

最も罪深き悪しき傍観者として戦況を凝視し、

流行病の通り過ぎつるのを待つのみが関の山である。

さりとて土足で誇大妄想に酔った為政者と新種の疾病の流行に

踏み躪られし吾が日常の中でのほほんと生きるのは

忍びない。

怒りに吾を忘れて戦火に飛び込むほどの

無鉄砲さも全く持ち合はせてゐない吾は、

吐き気がする日常に翻弄され

苛立つ吾を鎮める術すら知らぬことに吃驚しながらも

狂った世界の人身御供として

吾の身を捧げる覚悟すらもないことに

今更ながら痛打を受ける。

日日壊れ行く世界と吾が心は

ぼんやりとした不安の中で自死した芥川龍之介の如く

自身が壊死する外ないのか。

この不感症は吾ながら戦闘で殺された人人と

流行病に斃れた人人に対して失礼極まりないが、

どうあってもそれに対して道理が立たぬ世界と吾は

最早投げ遣りに日常に身を置くのだ。

それが針の筵の上に座してゐるとしても。

哀しき哉、これが現実なのだ。

目覚めし時、吾独り生を噛み締める一時、

吾は現実に唾を吐く。

——ぺっ。

と。